

『信仰はどのように継承されるか 創価学会にみる次世代育成』

天理ジェンダー・女性学研究室

猪瀬優理、北海道大学出版会、2011年

金子 珠理 Juri Kaneko

本書は、2004年度北海道大学大学院文学研究科に提出された博士論文『宗教集団における信仰継承と「ジェンダー」の再生産過程』をもとに、創価学会に関する調査研究の部分を抜き出して全面的に書き改められたものである。博士論文のタイトルとは異なり、本書においてジェンダーは分析の際の潜在的な変数の一つとして登場するに過ぎず、ジェンダーそれ自身が前面に出てくることはないが、分析の要所となるところにジェンダー批判による批判的視点が鋭く織り込まれている点が評者には興味深い。しかし大方の宗教関係者にとって「宗教とジェンダー」研究よりは、たとえば、よく言われるように、二世信者の増加が制度化・既成宗教化、「家の宗教」化を促し、教団の活力を衰退させる（教団ライフサイクル論）というのには本当だろうか、あるいは次世代に信仰が継承される要因は何か、という点にむしろ関心があると思われる。実は本書はそれらの問いにも、あくまでも創価学会という事例を通してではあるが、客観的な調査票調査のデータによりおのずと応えるものとなっている。

本書の中核をなす調査票調査（第4章、第5章を参照）の対象は、札幌市在住の活動的な創価学会員である。札幌市の会員数は名簿上およそ12万名で、札幌市全人口の15人に1人が学会員なのだが、これらの大半を抽出する本格的な調査となっている。このような一都市を網羅する規模の創価学会に関する調査表調査の実施は、1970年の福岡市の調査（鈴木広氏による）以来という。そもそも宗教社会学において、入信第二世代以降の信仰継承に関する包括的な調査と研究が数少ない中で、本書が日本最大の新宗教教団である創価学会を取り上げる意義は大きい。教団維持にとって、カリスマ的教祖の後継者問題も重要であるが、創価学会のような大規模教団の場合、一般信者数の維持も教団の規模と機能を下支えする大きな要素となっているからである。

実際に、調査票調査から得られた信仰継承率は7割近く、少なくとも札幌市の活動的な創価学会員家庭は6割以上の比較的高い信仰継承率が見込まれるという。猪瀬氏の調査結果分析からは、男性と女性とでは信仰継承の可能性を左右する背景的要因が異なることが示される。特に、親の信仰態度や教化態度は、男性にとっては、直接的な影響ばかりではなく、他の要素を経由して信仰態度のあり方に影響を及ぼしていることが示唆される。一方、女性にとっては、特に母親の影響が大きいことが推測されるという。その際、信仰熱心な態度は子どもの信仰継承を促進させ、熱心な教化態度は逆に信仰継承を阻害する可能性が指摘される。また創価学会の入会から「肯定的効果」を受け取っている人ほど現在の信仰態度が熱心であるが、この「肯定的効果」に影響を及ぼす要因にも男女差が見られる。「きょうだいの数」については、女性については有意な差が見られないが、男性については信仰継承の可能性に影響力が強い要素であることが分かる。興味深いことに、「肯定的効果」をより多く感じる人の価値観については、女性の場合は母親の子育て役割を重視する傾向があると推測されるのに対し、男性の場合は母親をはじめとする女性の子育て以外の活動にも肯定的である傾

向が見られるという。また、ジェンダーに関わる意識の持ち方が、信仰継承の可能性にも影響することが示唆されている。女性については性別役割分業を維持する方向性のほうが信仰継承には有利であり、男性の場合は逆に性別役割分業にとらわれないほうが信仰継承には有利である可能性があるという。ただし、男性の分析において、「女性のほうが平和を好む」というような男女の特性論を支持する傾向が影響しているところからみると、完全に性別役割分業を否定するということではないようではある。

次に、二世信者の増加が教団組織に与える影響、すなわち世代交代の効果が検証される。結果として、二世信者は一世信者よりも個人のみに基づくものとは捉えておらず、しかし家族にのみ基づくとも捉えておらず、バランスを保っている。また少なくとも活動的な信者については一世信者と二世信者の信仰態度に大きな差異はみられず、「二世信者の増加による教団の活力低下」は創価学会の活動的な二世信者には適用できないという。

さらに第6章では調査票調査からは読み取りきれない詳細な信仰継承の内実が、面接調査の資料からいくつかのパターンに分けて分析されている。第7章では、二世信者への教団の働きかけに焦点が当てられ、子どもたちを育成する目的で作られた組織である、「未来部」の歴史と活動状況、その展望について検討される。これらを補うものとして、第1章では本書の分析枠組みと問いの提示、第2章では創価学会についての概説、そして第3章では理想的な信仰継承のモデルが創価学会の機関紙などから示される。

猪瀬氏も認めるように、本書には創価学会の信仰を継承しなかった人びとに対する調査（情報）が不足している。しかし博士論文においては、エホバの証人（ものみの塔聖書冊子協会）からの脱会者への聞き取り調査をもとにして、創価学会の世代間信仰継承についても同様の問題が生じる可能性が少なくないことが推論的に補充されている。

猪瀬氏の関心は広い。氏が立ち上げた「宗教とリプロダクション」研究会には、宗教における生命倫理の問題のみならず「次世代育成」への関心が窺われる。宗教における親子関係が、その教団の組織や教理などどのような関わりをもちながら形成されているのか、他の教団への調査も期待される場所である。

